

翻刻『天文鈔本 新古今倭調集 春夏』(中)

片山 享

享

片山

99

桜さく遠山鳥のしたりおのなか／＼し日もあかぬ色哉

後鳥羽院

遠山鳥のとは人丸の哥をとれり、なか／＼し日もあかぬ色哉とは、終日さくらの咲たる時分、遠山にむかつて見ればろう／＼と打かすみて面白きさま也、見れども／＼あかぬ心也、九十の賀の心は老者ヲバ人のいとふなれども、徳ある人なれば九十までも猶あかぬ義也、なをも齡久しかれとの御心也、此集は尺阿逝去の後也

〔私〕云、尺阿九十ノ賀ノ事尺ノ阿覚也、尺ハ出家ナレバ尺氏ノ義、是ヲ後鳥羽院ハ三数号ト思召テ、三数号ハ常ニハツカヌ事トテ尺阿ト仰ラル、也、恐有事ナレバ釈氏ノ子細ヲモ申サレズトカヤ、此哥ハ賀記「三ウノ御哥トカヤ、尺阿ノ賀ハ哥道ニ付テナサルハトカヤ、名譽ノ御事也

俊成

100

いくとせの春に心をつくしきぬ哀とおもへみよしのゝ花

春に心をつくしきぬ、此哥は幾とせとをきては、きぬとはとまらぬてには也、つくしきぬらんと云義也、哀と思へとは、花を思情を哀と思へとも

(59)

101 はかなくて過にしかたをかそふれば花に物おもふ春そへにける

式子

過にし方をかぞふればとは、式子内親王の一生の所作は、花の事ばかりを思てあけくれ哥までにて送り給ふ事也

望山花^ツ

京極前関白

102 白雲のたなひく山のやま桜いづれを花とゆきておらまし

たなびく山の山ざくらとは、白雲と桜をいづれを見わけて花にはゆかましといへる心なり、見わかぬところのぞむと云題の心也、見るはこゝの事、望は遠所也

長家

103 花の色にあまきる霞立まよひ空さへ匂ふ山桜哉

天きる霞とは、もうろうとして空をへだてたる躰也、空さへ匂ふとは、薫^かずるにはあらず、空さへ花の色にかすみて面白時分なりとす

赤人

「三四ウ

104 百敷の大宮人はいとまあれや桜かさして今日もくらしつ

大宮人はいとまあれやとは、朝廷にては隙のなきなれ共、二月三月は何となくいとまある折節なれば、花をかざしてくらすとかや、百敷は百官の居る所なれば大裏を云り

業平

105 花にあかぬ敷はいつもせしか共今日の今宵に似る時はなし

敷はいつもせしか共とは、いつも春にあへば花にあかぬ物思ひをするといへる心也、物語にはさまくの事あ

れ共、集にのする時は当位のかたまで也

躬 恒

106 いもやすくねられさりけり春のよは花の散のみ夢に見えつゝ

「

ねられざりけりとは、いねられぬと云句をへだてゝをける也、思ねの夢なれば花のちるを見る也、此花ちりてはせうしかなとおもふゆへ也、夢に四数あり、へ喜随の夢へ思ひの夢へ偽夢へ臟府の煩によつて見る夢あり、ねられざりけりとは、花をおもふによつて、ちやつとはさめくする事也、百年は花にやどりて過してき、此世は蝶の夢にそ有けるとなん、是は莊子の語より読也

伊 勢

107 山桜ちりてみゆきにまかひなはいつれか花と春にとは南

ちりてみ雪にまがひなばとは、此雪桜のちる時分まであらば、花にまがふべし、それをば誰「三五」かしらん、春にとはなんと云り

貫 之

108 我か宿の物なりなから桜花散をはえこそとゝめさりけれ

物なりながらとは、物なるとはいはれず、わが宿の物なり、わが宿の物からといへば也、わが宿の物ならば、わがまゝになすべけれ共散をばえ留難しと也

寛平御時后宮

読 人

109 霞たつ春の山へに桜花(朱)あかす散(朱)とや鶯のなく

あかずちるとや鶯のなくとは、たとへば千年万年見る共花はあかれじ物なるに、あかずとや鶯がこなたへとふやうになきけるとかや、さらに云に及ざる事也

「

110 春雨はいたくなふりそ桜花また見ぬ人にちらまくもおし

赤人 山ノ辺ノ氏也

まだ見ぬ人にちらまくもおしとは、まだ見ぬ人とはわが事也、春雨のやまば行て見んとおもへば、二日三日降つゞけば花ははや散らんおしきと云ル心也

111 故郷の花は散つゝみよし野ゝ山の桜はまた盛なり

家持

山のさくらはまださかりなりとは、春は里より花はさきて山にさく也、陽氣は里より起ル也、秋は陰氣山より生る故也、さて紅葉は山よりしてさとにあるもの也、次第に花のさきもて行所を見たるさまなり」三六ウ

貫之

112 花の香に衣はふかく成にけりこのしたかけの風のまにゝ

衣はふかく成にけりとは、こゝかしこの花を見て、花にふれたる衣の匂ひのふかき事也、匂ひの輕重は、木の下陰の風にまかすると也、まにゝは随意とも任意ともまゝといへるのことば也

俊成女

113 風かよふね覺の袖の花〇香にかほる枕の春の夜の月

かほる枕の春の夜の夢とは、玉のおばしま錦のしとねにねて、春の夜の見もはてぬゆめに、風の花の香を吹送りて夢をにははしたるさま、まことに風流なる事也

一

家隆

114 此ころは(朱)しるも知らぬも(朱)玉鉾の道行人は花の香そする

しるもしらぬもとは、知人もしらぬ人も花ごのみする心ざしは、いづれもひとつ也、然ればしらぬ人も知音

也、玉銚の道とは大道也、やすむときはこをたてをけば也、いづれも花にふれ、ば袖の香ぞすると也

俊 成

115 又や見んかた野々みの、桜がり花の雪ちる春の曙

かたのゝみの、桜がりとは、明ぼのゝくらきをも云り、又さくらを尋るをも云り、是は鷹狩をして花を見たる事也、折しも花の雪ニセウ打ちりて、明ぼのゝ景氣のおもしろき事は、又や見んと也、良晨美景をそろへて見るなり、又や見んとは是程の事には又も逢難しと也、俊成は俸禄キョウリョクと云、名誉と云、年久齡と云、かたゝ満足したる事とかや、春の鷹狩の證哥には、桜がり雨はふりきぬ同じくはぬるとも花のかげにやとらん、是も鷹がりして花を見たる哥也

116 散ちらすへおほつかなき(朱)は春霞たなひく山の桜なりけり

祝部成仲 日吉ノ禰宜ノ義也
ツクリヘノ

おほつかなきは春霞たなびく山の桜なりけりとは、花に著する故散かすらんとおほつかなく思ふと也

能因法師

117 山寺里イの春の夕くれ来て見れば入会の鐘に花そちりける

入会の鐘に花そちりけるとは、心敬の説には、いりあひの鐘のひゞきにより花はちると也、物はひゞきによつての事なればなり、静喜の説は、いりあひのろうゝとなりて、其時分花の散たるのおもしろきさま成べし、此哥は津の国金福寺と云山寺にての哥也、へ山里にまかりてとありイ本

恵 慶

118 桜ちる春の山辺はうかりけり世をのかれにとこしかひもなく

春の山べはうかりけり世をのがれにとこしかひもなくとは、世をのがれて山にすまば安かるべきとおもへは、

さくらのちりて物うければ、いづくもおなじ世上なりと云り

花見侍ける人にさそはれて読侍ける

康資王母
ヲホキミノハ、

「三八ウ

119 山桜花のしたかせふきにけり木の本毎の雪のむらきえ

花の下風吹にけりとは吹らむと也、木の下ごとの雪のむらぎえとは、風の木の下毎へ花を吹よせたとれば雪の村消のごとし、当位はふかぬ風也

源 重之

120 春雨のそをふる空のをやみせず落る泪に花そ散ける

そほぶる空のをやみせずとは、そほぶるはそとふる事、そほぬれるも同じ事也、をやみせずとは、ふりもせずやみもせぬ事也、おつる涙に花ぞちりけるとは、万人花をおしむなみだが春雨となりてふるよと読り」

121 鴈か音の帰る羽風やさそふらむ過行嶺の花も残らぬ

帰るは風やさそふらんとは、花までつれて行たると云り、鴈か音と云事はねはこゑなり、余の物より鴈の声はたかきゆへ音にてしれば、四ツ字につけたるまゝ云也、梅がゝ花をば花の香と云、何れも聞よきを云りと云ゝ

具 親

122 時しもあれたのむの鴈の別さへ花ちる比のみよしのゝ里

たのむの鴈の別さへとは、時こそあれ、かうくの時と云義也、ときしも都の花のちる時分、此みよしのゝ里の鴈も帰ると云心也、是は武蔵のみよしのにての哥也、大和の名所へかけて読り、たのむたのも五韵相通也

見^ミ山花^{ハナ}、

経 信

123 山深み杉のむら立見えぬまで尾の上風^{ウツバカゼ}に花の散哉

「三九ウ

杉のむら立見えぬまでとは、題の見と云字に心あり、花といへば見るの字はあり、それは常のごとし、是は見と云字管要に読り、杉のむら立見えぬまでとは、尾上の風の万木に花を雪のごとくちらしたる義也、然れば此見えずは見えぬ也、見えぬまでといへば見度と云義也、梅の花それ共見えす久かたの天きる雪のなべてふれば、此哥は見る義也

師 頼

124 木のしたの苔のみとりも見えぬまでやへ散しける山桜かな

苔のみとりも見えぬまで八重ちりしけるとは、苔の青きうへに花のちりかゝりたるの見事なるを、八重ちりしけるとはおほくちると云心也、これは花のちるをとり所になしたる也

頭 輔

125 麓まで尾上の桜ちり来すはたゝ白雲と見てや過まし

おのへの桜ちりこずはとは、たかき嶺の花のこゝへちりこずはたゞ雲と見てや過ましと云り、ふもとへ散の見事なりと云事を

花落客稀

範 兼

126 花ちればとふ人稀に成はてゝいとひし風の音のみそする

「四〇ウ

とふ人まれに成はてゝとは、上の句にて客の稀なると云題の心は聞えたる也、題をば上ゝ下にて読事然べき也、先はわろし、花の時こそ人もとひけれ、散はてゝはとわぬ義なり、いとひし風の音のみぞするとは、をんそうゑくあひべつりくの心也、そいたき花にはそはずして、いやなるかぜにはそふて音のみきくと也

西 行

127 ^(朱)へ詠むとて・花にもいたく馴ぬれば散別こそかなしかりけれ ^(朱)

花にもいたくなれぬればとは、いたくとはつよくなれたると云義、散わかれこそかなしかりければとは、執着する故かなしき事は有と云心也

越前 女房也、女ノ国名ハサガル也

128 山里の庭よりほかのみちもかな花ちりぬやと人もこそとへ

庭より外とは、山家は徒然なれば人の来よかしとはおもへ共、花の散庭をばとわん人はいや也、庭より外の道もがなと読り、人がとひかせうずらふと云義也、花ちりぬやとのぬの字、おはんぬにもあらず、又はすにもあらず、つといへる義也

湖上花

十八ニシテ死ス 母ハ琴引也、宮内卿ハ哥ヲ案シテ血ヲ吐ト也

129 花さそふ比良の山風吹にけり漕行舟の跡見ゆるまで

ひらの山風吹にけりとは、ひらの山には花の乱満と咲たる所也、山風が花をみつうみへおほく「四」吹ちらせば、こき行舟も跡の見ゆるはがりなりとす、^(マ)へ世の中を何にたとへんの本哥也、是は跡のあるやうに本哥を引かへて読る也、本哥の心は世中は舟の跡なきにたとへて読り

関路ノ花 路トハ関ハ道ニスエヘル物ナレバ也

130 相坂や梢の花を吹からに嵐そかすむ関の杉村

梢の花を吹からにとは、霞と風とは敵のやう也、しかれ共花を吹から風も一に霞て面白様也

讃岐

131 山たかみ嶺の嵐にちる花の月にあまきる明かたの空

嶺の嵐にちる花の月に天ぎるとは、嵐に花の乱満とちりて空をへだてたる事也、「ふもとより見れば花も見えず、月も又花にあまぎられて見えぬ義也、折しも面白き風情なりとす、たかみのみはきもしもわろし、みとか

なへば也、みともつていふ事なり、みなへ通ずる也

崇徳院

132 山たかみ岩ねの桜散ときはあまのは衣なつかとそ見る

岩ねの桜ちる時はあまのは衣とは、盤石劫に天人のくだつてなづる袖のごとしと花を読み、なづるとそとはいはれず、なづるかと云べきいひたらず、しかれども王の御哥なれば也

頼 輔

「四二」

133 散まかふ花のよそ目はよしの山嵐にさはく嶺の白雲

花のよそ目はよし野山とは、よそ目はよしといひかけたる也、木の下にてはちる事のうきといへる事を最勝四天王院と云は、大裏の中につくりて富門地極増長光目の四天王をたて、金光明経を読んで王の祈をする所也、それを再興して障子に後鳥羽院の哥を読せられける時の事也

太上天皇

134 御吉野のたかねの桜ちりにけり嵐もしろき春の明はの

嵐もしろきとは、嵐には色鉢のなき物なれ共桜のちるなれば、明更の時分白妙に見えたるの「見事なる義也

定 家

135

今日コズハアスハ雪トソノ本哥也、本哥ラツダテ、ヨメリ
桜色の庭の春風跡もなしとは、その人の雪とたに見ん

庭の春風跡もなしとは、桜色はうすあかきとばかり云り、是は雪のごとく白妙と云り、とはゞその人のとは、花の時人のとふこそあれ、雪になるころとふは曲なし、それさへ雪とだに見ん人もなしとなり
ひとゝせしのひておほうちの花見にまかりてとは、大裏はびうゝとしたればそれには摂政を番におかれて、天子は里大裏に御座して大内の花御らんに行幸ありて、この哥をあそばしけり

太上天皇

「四三ウ

136 けふたにも庭を盛とうつる花消すはあり共雪かとも見よ

庭をさかりとうつる花とは、けふ来ずはの本哥をもつて読り、庭をさかりとは、散たる花の事也、本哥はあすは雪とぞを引かへて、けふだにもと読きらずはあり共花をと有を雪かとも見よと読給へる特妙也

御返し

摂政

137 さそはれぬ人のためとや残り劔へあすよりさき(朱)の花のしら雪(朱)

人のためとや残りけんとは、さそはれぬ人とはいかなればわたくしを御さそひ候はぬとの義也、あすよりさきの白雪とは、あすよりさきはけふの事也

家のやへさくらを

式子

「

138

八重桜ヲ八重切フト云ル粉骨也
やへ匂ふ軒端の桜うつろひぬ風よりさきにとふ人もかな

軒ばの桜うつろひぬとは、うつろふに二やうあり、色のかはる一、又ちるをも云り、此哥はちる事也、かつくうつろへ共残りあればとふて哥をよみたまへとの心也、風よりさきとは、風は一定とふべきなれば風よりさきにとひ給へと也

返し

惟明親王

式子内親王ノヲ
イニテ坐ス也

139

つらきかな移ふまでに八重桜とへ共いはて過る心は

移ふまでにやへさくらとは、うつろふ時分まで告給わぬ物かなと、をし返していへる事也、此返しを返詰ツメと云り、増答返しと同、八重桜にとへとの義は、八重に對して云ル詞也、今までとへ「四四ウ」ともいはで過る心は曲なきと也、八重桜は余の桜よりも遅ちる物也、是等しゆぎやうなり

家隆

140 桜花夢かうつゝか白雲の絶てつねなき嶺の春風

夢かうつゝか白雲のとは、夢とおもへばしかもある物なればうつゝ也、たえてつねなきとは、例には生ある物の死義也、是はないものゝでくるやうに読なしたる也、つれなきとは、絶て其まゝ見えぬはつれなき也、両説なり、さくら花と云に二あり、へ桜花さきにけらしな足引のへ桜花春くはられる時だにもと云、是はよび出したる義・桜花さきにけらしはただいひたる義・桜花夢かの哥はよび出したる事也、白雲は絶てといはんため也

(朱)
(朱)
(朱)

(頭注) 花ノ散テ絶ルカトスレバ又咲ナリ、一春ノ中モ又年ノ花ノ絶又義モアリ

俊成女

141 恨すや浮世を花のいとひつゝさそふ風あらはと思ひけるをは

浮世を花のいとひつゝとは、此世を花も見かきりてぞさそふ風をも待つらう、此時は風をば恨ずやと也、風がふけかしと花は思ふらむと也、風の科にはあらざる也、へわびぬれば身をうき草の本哥也

後徳大寺

142 はかなさを外にもいはし桜花咲ては散ぬあはれ世の中

外にもいわし桜花とは、桜がはかなさの手本にはあらず、むまれてはかならず死ぬる道理なれば、さきてはちりぬあはれ世の中と読り、「四五ウ 人の上にくわんじたる也

俊 恵

143 なかむへき残りの春をかそふれは花と共にもちる涙哉

残りの春をかそふればとは、わが年の残りの末のすくなき事をかそふれば花と共にもちる涙かなと読り、感涙あさからず

大 輔

144 花も又わかれむ春はおもひいてよ咲ちるたひの心つくしを

別ん春は思出よとは、八十年花に心をつくしきたるをば、わかれて後花も思ひ出よとの心あはれふかく侍り」

良平

145 ちる花の忘形見の岑の雲そをたに残せ春の山風

忘かた見の嶺の雲そをだに残せとは、^(宋)あかでこそ思ひん中^(ママ)にはなれなめそをだに後の忘がたみに、と云本哥

也、そをだにとはそれなり共と云義、雲のかた見とおもふに花をちらすさへあるに、又かた見の雲を山風の吹はらへるのうたてしきと也

落花を

雅經

146 花さそふ名残を雲に吹とめてしはしは匂へ春の山風

なごりを雲に吹とめてしはしは匂へとは、花をさそふ風ならば其なごりを雲にふき「四六ウとめてをけ、吹ちらさんよりもしばし我匂ひにせよと風をいさめたる義也、たとへば、人の惜む物をこひとつて水などへ入たるほどの事也、舍利弗の眼をこひとつて、外道がふみひらきたるほどの事なりといへり

後白河院御哥

147 おしめ共散はてぬれは桜花今は梢を詠む斗そ

散はてぬれば桜花今は梢をながむばかりぞはやうもなき哥也、正路にしてわるくもなく、又よしともなし

太上天皇

148 いかにせん

よにふるながめしばの戸にとは、よにふるなかめしとつゞくる也、浮世をのがれて仙洞に引こもりたれども、うつろふ花の春の暮のうき事の千変万化は同事とかや、^(宋)花の色はうつりにけりないたづらにの本哥也、なが

雨詠両方へかけて読り

残春のこゝろを

149 吉野山花の古郷あとたえてむなしき枝に春風そふく
秘哥

摂政

150 古郷の花のさかりは過ぬれと面影さらぬ春の空哉

花のさかりは過ぬれど面影さらぬ春の空かなとは、花は過ぬれ共まだ春といへば其面影はのこりたると云り

経信

151 花はちりその色となく詠むれはむなしき空に春雨そふる

その色となくながむればとは、さびしきまゝ静に空をつくくくと見れば、春雨のこまかに降を見出したる心也、かくあるも花の事を惜たるまゝながめたと也

式子

おほいまうち君、月輪寺に

元輔

152 たかたにかあすはのこさむ山桜こほれて匂へへけふのかた見に。
(マ) (朱)

あすは残らん山桜こぼれて匂へとは、大臣殿の御出に花もふるまひをなして匂へと也、あすは無曲事也、けふこぼれて匂て今日の形見にせよと也

曲水の宴とは、周の世には三月三日を用る也、魏の世には上巳を用る也、水成ニ巴字、初三日と云は、みつのともゑのごとくめぐる所に盃をみづにうかへておのく詩をつくつて酒を飲なり

花ノ哥ノ中ニ入ル、心ハ、三月ノ始ノ事ナレバ末ニ入ス、桃花ナレバ花ノ間ニ入ル、ト云々

家持

153 から人の舟をうかへてあそふてふ今日そ我せこ花かつらせよ

けふもわがせこ花かつらせよとは、花をかざしてわがせこあそび給へといへる心也、女房の方「四ハ」より男を
さしてわがせこと云り、花かつらはかざしなり

月入^{ツキイラス}ニ花灘^{ハナナシ}暗^{クラシ} 瀬トモナシダトモ読リ

是 則

154 花なかず瀬をも見るへき三日月のわれて入ぬる^(朱)山^(朱)の遠方^(朱)・

瀬をも見るべきみか月のわれて入ぬるとは、ながるゝ花をも見るべきに、みか月さへ入てくらしと云り、三日
月はとくいれば也、山のをちかたはをちかたの山と云べきなれ共、河の瀬なれば山は遠方にあれば也

雲林院のさくら

良 遅^{トシ}

155 尋つる花も我身もおとろへて後の春共えこそ契らね

花もわが身もおとろへてとは、わづかに残たる花と六十のわれもおとろへはおなじ事也、又明年の春をも期し
難しと也

寂 蓮

156 思ひ立鳥は古果も頼むらん馴ぬる花の跡の夕暮

鳥は古果も頼むらんとは、思ふ人にはなるゝは末にも又逢べき頼あり、なれぬる花の跡には我身はなにとかな
らんずらんと、おもひうかれたる心也、鳥は古果もたのめば也、おもひ立鳥もおもゝとしたるなりなるべし
散にけりあはれ恨の誰なれば花の跡問春の山風

「 四九ウ

あはれ恨の誰なればとは、心敬の説には風が花をばちらしたるよと恨たるに、花の跡に風のふくを見てさては
風の科にはあらず、生得花のをのづから散けるよと花を恨たる心也、五もじにちりにけりと云字にかなへり、

宗祇の説は、青葉の時風のとふを見て、昔花に執心ある者ばし風となりて青葉までとふかと也、木戸の説は、此花の跡をうらめしげに風の吹て過るは、たがちらしたる花ぞと風のうらむる義也

公経

158 春ふかく尋いるさの山のはにへはの見し雲の・色そ残れる^(朱)

ほのみし雲の色ぞ残れるとは、春の中ばの時分尋て入しに、ほのかなる雲の花の後」又尋見るにはじめ見しごとく雲の残れりといへる事を、ほのかなるは物のはじめに見えたるかた也、かすかなるはなくなる物のはて也、同物の中にも分別すべきなり、入さの山名所にあらず

摂政

159 泊瀬山移ふ花に春暮てまかひし雲を嶺に残れる

うつろふ花に春くれてまがひし雲ぞとは、詞つゞきの面白き哥也、花のさかりなる時は雲もひとつなれ共、花のちりて後は本の雲は其まゝ嶺にのこりて、花のかた見となると読り

家隆

「五〇ウ

160 吉野川岸の山吹咲にけり嶺の桜は散はてぬらむ

岸の山吹さきにけり嶺のさくらはちりはてぬらんとは、山吹は春の暮に咲なれば嶺の桜はいまちるらんとおもひやりたる也、桜はちりはてぬらんは、末にはなるてには也、^(朱)秋萩の花さきにけり高砂のおのへの鹿もいまやなくらの哥の類なるへし

俊成

161 駒とめて猶水かはん山吹の花の露そふ井ての玉川

なを水かはん山吹のとは、駒を打入て水かひながら山吹の花の見事なるを見たるさま也、花の露とはよはき詞

と兼載云給ふとかや、今はくるしからず

国信クニノブ

162 岩ねこす清滝川のはやければ(朱)浪折かくる(朱)岸の山吹

浪おりかくる岸の山吹とは、折かくるは波・の打かくる事也、此浪おりかくるは、山吹のなみにおらるゝと云義也

原見王アラミノミカド

163 河すなく神なひ川に影見えて今や咲からむ山吹の花

神なひ川に影見えて今や咲らん山吹の花と思やりたる哥也、神なひとは、春日の明神の南にある所なれば号する也

興風

「五一ウ

164 あし引の山吹の花咲にけり井手の蛙は今や鳴らん

山吹の花咲にけり井での蛙はいまやなくらん、まへの哥のうらなり、山吹の花を見て此時分蛙はなくらんと也

赤人

其一卷ノ中ニ氏ヲ始ニ書ハ後ハ名乗バカリ書也、實歟也

165 恋しくは形見にせんと我宿に植し藤なみ今さかり也

かたみにせんとわか宿にうへし藤なみいまさかりなりとは、形見は春の形見にせんと云事也
飛香舎には藤つばあり、女御の住給ふ所也、

延喜御哥

166 かくてこそ見まほしけれ万代をかけて匂へる藤なみの花

延喜ハ卅六年代ヲ持給フ也
六今ヲキウメトスル故也

藤花宴に

「

万代をかけては匂へる藤なみの花とは、かくてこそは藤は物にかゝるなれば也、藤つぼにて花見給ふ事なれば、祝言してあそばし給ふ也

天曆御哥

167 まとゐしてくれ共あかぬ藤なみのたゝまくおしきけふにもある哉

くれ共あかぬ藤なみのたゝまくおしきけふにもある哉、たゝまくおしきとは、面白き所は立歸るのおしきと云心也、唐錦たゝまくも同事也

清真公ノ家

摂政関白ノ贈名也

貫 之

168 暮ぬとはおもふ物から藤の花さける宿には春ぞ久しき

思ふ物から藤の花さける宿には春ぞひさしきとは、藤は夏までさけば春ぞひさしき」五二と祝言して読り、へ長生殿ノ裏ニハ春秋留ノ心也

169 みとりなる松にかゝれる藤なれとをのか比とそ花はさきける

松にかゝれる藤なれどをのか比とぞとは、松にかゝる藤ならば、松のかうせきの様に有べきを、をのがさまにさきたると也、藤は佞人（ヤイ）の劫を得て自立（ヤイ）んずることをえずといふ事のある也、題藤の松にかゝれるをとあり

実方朝臣（ヤイ）の陳に遣しける

道 信

170 散残る花もやあると打むれてみ山かくれを尋てしかな

花もやあると打むれてとは、実方をつれだちてみ山かくれの花を尋たう候と云の心也、

行 尊

171 木の下（ヤイ）のすみかもいまは荒ぬへし春し暮なは誰か問らん

すみ家も今はあれぬべしとは、山家は人となるころなれば、花の時こそ人もとひたれ、散ての後とはふ人

なければ荒ぬべしと云り

寂蓮

172 暮秘哥也て行春のみなとはしらね共霞に落る宇治の柴舟

春のみなとはしらねども霞におつる宇治の柴舟とは、春の暮て行所はしらね也、然れども柴舟の霞のうちにちやつとはかくれかくれては、おちくするの見事なれば、是が春の駄ツイなりとす、今日の見事は柴舟なりとす

山家三月尽

伊綱

「五三ウ」

173 来ぬまでも花ゆへ人のまたれつる春も暮ぬるみ山への里

花ゆへ人のまたれつるとは、花のほどは人もとひかせうずらふと待たるさま也

174 いそのかみ布留の早田を打かへし(朱)恨かねたる(朱)春の暮かな

ふるのわさ田を打かへしとは、春の末に田をばかへせば也、うちかへしうらみかねたるとは、春の帰るは恨なれ共打かへし案ずれば、光陰はとまらぬ物なれば、はるのとはにはあらずと云り

読人しらす

175 まてといふにとまらぬ物としりなからしめてそおしき春の別は

とまらぬ物としりながらしめてぞおしき春のわかればとは、春のとまらぬは道理なり、かくはあれども又おしむも道理なりと云る心也

山家暮春

宮内卿

176 柴の戸をさすや日影の名残なく春暮かゝる山のはの雲

さすや日影のなこりなく春くれかゝる山はの雲と云心は、明ころひる時までにはたのみなり、日影の山にいりてくらくなるが春のかぎりなりと云心也、暮をつめて春をおしみたる心也、草の戸とも有べきなれ共、柴の戸遠

く山家の題なれば也、柴の戸にては西を思ふ心なれば也、^(朱)日相観の心也

攝 政

177 あすよりは志賀の花園稀にたに誰かはとはん春の古郷

「五四ウ

志賀の花園稀にたに誰かはとはん春のふる郷とは花のある時は都也、散て後は春の古郷也、ふる里の春はたゞ
いひたる事なり、春のふる里には同かるべからず

(春歌下終)